#### Midnight Press bimonthly

No.2 2012 August

http://www.midnightpress.co.jp email: mpweb2012@gmail.com

CONTENTS

詩 小川三郎 批評 瀬尾育生

インタビュー

中村新史 (ジャズピアニスト) 浅野言朗 小林レント 連載

水島英巳 書評

雀 か が 遠 背 < 伸 び 見通 を L l 7 7 61

る。

雀 私 遥 をぎゅ は 手を 伸 を 0 لح ば

握 ŋ うぶ す。

ベ 雀 ラ S は ン n ま ダ L わ ば 13 ŋ か 台 13 ŋ 所 13 13  $\langle$ 道 5 生 息 端 で b L 7 61 た。 た。

私あ は 11 0

羽 ず 0 握 ŋ 0 Š 喉

が

渇

7

13

た。

休

日

を過ごす。

自 分 自 [身を見失 で わ な

13 よう

暗 くなるま

どこか 雀 握 ŋ げることなく握りつぶされ は まっ つぶ 0) して たく不可解だ。 家 が 燃えて 13 る。 61 る 0) が 見える。

> それ 0 さり 翼 が私をひどく苦しませた。 か は 0) لح 遠 誰 死  $\langle$ か ま 6 0) 名を呟きな で でしまう。 飛 べ な Vi がら

雀 雀 私 雀 0  $\mathcal{O}$ 0 0) 0) 色 鳴 たくみす 足 き は 0) 声 ほ う は ぼら 語 が よっ 彙 が L 少 ぽど遠くまでい 61 ない b のだ。 いける。

そういうところが 葉に なるのに。

13 日 雀 ま 常 は P 13 私 雀 あ 0 は Š 痛 n 2 7 13 な 11 って

0) 感 情 13 なり 0 0 あ

小

郎

雀

#### 時 間 は い つも 回 帰して L١ る 2

#### Ŏ 五. 年五 月 \* IJ ル ケ **(**) 薔薇 0) · 名前

#### 尾育 生

ある。 これらはフロッピイに入っているの メモしたときのフロッピイの 気になっていたこの問題を、 題名に記した年月は、それ以前から のメモがあちこちから出てくるが、 昔のデータを開いてみると、この手 なかなか書き出せないでいることが めると手に負えなくなりそうなので、 いることかも知れず、本気で論じ始 日 ことによると「 大半はもう開けなくなっている。 ますます発表するところがない。 ドイツ語の問題がかかわるの だれかがすでに言って 、発見」な 最初に デー 0) か 夕

るし、 ドイ ヴォルプスヴェーデ、パリ、ローマ、 ラハ、イタリア、ベルリン、ロシア、 動」のすさまじさに呆然とする。プ ヨーロッパ」の詩人と呼んだほうがるし、なによりも「帝国主義段階の うな意味で「技術時代の詩人」であ 同時にキットラー いいと思う。年譜をたどれば彼の「移 とは書かないが、これが三十 い散文だ。リルケはヨー IJ ツ、カプリ、ウイーン……もう の伝統の上に書いた詩人だが ケの すでに結婚もして 夢の本より」 が言及しているよ ・ロッパー は すば いるし、 ·歳く 抒

ヴァル つぐ転居をやめたことがな 動強迫・定住恐怖につかれたように、 0) 国境などまるで無視してヨーロッ 隅々まで縦横に行き来する転 る。 モン療養所にいたるまで、 あ と 晚 年 0) ミュゾッ 居に 1 パ 移 P

植物の ラとの ような一節がある。 の「第七番目の夢」のなかに、次の 彼女」は夢の少女―― 夢 0 中 結婚の後に書かれている。そ 本より」は一九〇二年、クラ 間くらいだ。 「私」は人間だが、 八間と動 物・

あ

で

わ」。「ねえ君」と私はまじめな顔で たたちはいつも名前を尋ねて、名前 は、もうそれだけで何かがわかって たの う名前なの、と彼女はいたずらっぽ んでいる。彼女はいまでは\*\* のことを気にかけて、それがまるで やれやれという感じで言った。「あな しまった、というわけね」。 く、一つの名前を告げた。私はうな その少女はいま結婚してメランに住 一人の少女のことだ、と私は思った。 彼 女は 題みたいにふるまっているんだ かもしれない。「もちろんあなた た。ことによるとうなずきすぎ か のことを話して 彼女は、 11 とい た。

> ずすわけにいかない。ただそれだけがかけられて、薔薇たちはそれをはらないんだからね。小さな木の名札 薔薇たちに似てくる。取り違えられ いう名前かに興味を持っているし、前を知っている。彼らは薔薇がどる のことだ。だが人間たちは薔薇の名 だ。薔薇たちは自分たちの名前 モーションとか名づけられている。 るくらいに。 人間たちは薔薇たちをいわば一生の たら、誰にだってそれを教えてやる。 注意深くそれを暗記して、尋ねられ でもそれは余計といえば余計 夫人とかカーモンド ねー いだ養ってやり、最後にはとても を知っている。彼らは薔薇がどう マリ・ボーマンとかテストゥー あることなん 細かな部分にいたるま 伯爵夫人とか なこと を知

であるのか知らないのだ。人間 が、薔薇たちは自らがどういう名 だから、人間は薔薇たちに、愛する るとはどういうことなのだろう。 名 てる人間が、なのか、薔薇に自分の ただひたすら人間の方が(薔薇を育 たちは人間に答えを返すことはない。 づけるのだが、だからといって薔薇 薇たちを、それが枯れるまで育てつ 女性などに因んだ名前をつける。だ 薇に対する人間の愛は 気持ちになる。人間が薔薇に似てく だ を付 がここまで読むとすこし不安定な ح 0) 訳 けられた人間 は間違っていないはずだ。 人間 なのか)、 的 なも は薔 0) 前

> う――そういう意味なのだろうか。 互いに区別できないほどに似てし んだんと薔薇に似て ゆき、つ いに ま は

夢の ものを、いつのまにかとりちがえて で、代名詞と所有冠詞が指している 読んでみる。するとこの文章の途 止まり、もう一度遡ってこの文章を 突な感じがする。読者はここで立ち 詩的なレトリックとしてもすこし唐 だがこの部 名づけられる、 がつくられ、種ごとに人名によって い。たしかに薔薇は人工的にその 61 中で信じられているのかもしれな たのではないかと思われてくる。 記 間 述だから、そんな可 が 分は、 特別な植物である。 似 夢の論理としても、 てくる―― 能性が夢 れ 種

zum Verwechseln, bis auf eine werden ihnen am Ende sehr ähnlich sie sozusagen ihr ganzes Leben und sorgfältig auswendig und sagen sie dafür, wie sie heißen, sie lernen sie ihre Namen; sie interessieren sich an und sie nehmen es nicht ab. Das Kleinigkeit. jedem, der danach fragt. Sie ernähren ist alles. Die Menschen aber wissen hängt ihnen ein kleines Holztäfelchen Sie wissen ihre Namen nicht. Man

ことも出来ない。それだけのこと。で の名札がかけられてそれを取り外す 彼 らは 彼らの名前を知らない。 木

た。「人間にとってそれ

は

ゃ

養ってやり、最後には「それら」には「それら」をいわば一生のあいだ そっくりになる。とりちがえられる れにでもそれを教えてやる。「彼ら」 くそれらを暗記し、尋ねられたらだ ている。「彼 いう名前なのかを気にかけ、注意深 も人間 たちは 細かな部分にいたるまで。 ら」は「彼ら」 「彼ら」 0 名 前 がどう を

ちがえられるくらいに。 自 くそれらの名前を暗記し、尋ねられ 知っている。 人間たちは自分たちの名前をいわば たらだれにでもそれを教えてやる。 いう名前 「でも人間たちは自分たちの名前を 分の名前にそっくりになる。とり 代 のあいだ養っており、最後には されるべきではないだろう に置き換えるなら、ここはこ なのかを気にかけ、 と所有冠詞で指 人間たちは互いがどう され 細かな部分 注意深 たも か。

けだ。これで十分に論理的だ。だが イ 前 に過ぎないが、人間たちにおいて名 て名前は余分にぶら下げられたもの が成就する場所である、というわ は、そこで自分のアイデンティテ この文章は薔薇における名前この訳のほうがよいような気が 人間における名前 っている。薔薇たちにお 注意深い読者 止まり、 0) 意 味 振 す

> 文章の 返って か。 りすこしおかし 書き方は、それにしてもやは み な 11 で いのではないだろう は 11 5 れ な ر د 0)

読者は後者の訳にたどりつく。 もう一度たどりなおして、ようやく 自然に浮かび上がってくる。だがそ け 女らの、それらの)が多すぎるのだ。 それら)と所有冠詞 ihr(彼らの、彼 をも、「人間たち」をも、いずれ 詞が多すぎるし、しかも「薔薇たち」 すためには、ここにはあまりに代名理解されるべき論理を一義的に示 のを感じて立ち止まり、文脈を遡り 前から後ろへ、普通に読み進めてゆ 指示しうる代名詞 流れの中でなにか不安にさせるも が、はじめに示したような文脈が sie(彼ら、彼女ら、 b

車が鉄道の 気づかない 最後におかれたちいさな比喩のトゲ ときのように、読者は二つの別の文 のようなものに気づかなければ、読 では事態はほぼ矛盾なく進行する。 中に入り込ん は ·だろう。 ・が鉄道の転轍機の上を通り過ぎる .彼らの名前を知らない)この文を へと導かれる。そしていずれ Sie wissen ihre Namen nicht. 取るかによって、 別の線路があるなどとは まここを でしまえば、その 通 ŋ まるで列 過 . (彼ら ごぎて 内かの ゆ

の文章は曖昧に書かれている。

ح

これ な解 IJ るかを語 ように「一義的に」出来上 zweideutig「二重意味的 イ ではないだろうか。しかも、人間のア 半意識的に仕掛けた曖昧さの罠なの 曖 ルケはあえて二重に書かれ、二重 デンティティが名前とともにどの 一味に がする。 釈可能な文章を置いているよう はリルケが意識的 」というの っているまさにその部分に、 をドイ · ツ 語 あ がってく という。 いるいは で は

され、複数に意味付けられるのが正人」でありうる。それは複数に解釈生」であり、またある部分で「友で「父」であり、ある部分で「先に登場するある人物はある部分 多元解釈「 Verdichtung などと呼んだ。 重層決定 て現われてくる。たとえば夢の中は、複数の意味を重層的に背負っによれば、夢の中の登場人物や形象 年にかけてのことである。フロイト しい。フロイトはこのことを重層決 61 定 Überdeterminierung あるいは圧縮 たのは、一九〇〇年から一九 フ 口 イトが『夢解 Überdeutung されるのが正 釈(夢 判 断 (1) 』を書 0

た、というようなことではないと思論理を意図的に詩的散文に応用しもここにあるのは、彼がフロイトのうかはわからないが、いずれにしてリルケがそれを読んでいたのかど

夢の なにか特別な時期だったのだ。 語の論理の表層で泡をたてて砕 語の海面 うのは、 る。一九〇一年とか一九〇二年とい 事 態 が、 世 記 夢 同時に起こっているのであ に浮かび上がってきて、言 の中で、 の論理がそんなふうに言 深層まで相似した 同じ 時 期 0) ける

を作った。 味のなかでは決して落ち着きを得な 性を受け止めるために、一義的な意 がリルケは同じところで、夢の重 の自己同一的な「その人」になる。 れるところで、 のだ。意識が一本の線の形に記述さ れて自己同一性をつくりだす場所 にそこが、人間が自らの名前と結 論理のなかへ導かれる。そしてまさ 述」ということが強いる一義 いような、二重・多重意味的な文章 かに入り込むために、ある一義的な まま言葉に写そうとした。多義的で うことのなかで起こる事態を、その 層 IJ 的 ル な夢状態は、ふつうなら「記 ケ は、 人間ははじめて一人 夢を記 述 する」と 性のな だ 層 な ば

どうしたら可能 をそのまま二重 ちがいない。 義化」ということが含まれているに ということのなかには本質的 され だ からそれ などということが、い なければならない。 原文の二重・多 は二重・多 になるの ·多重意味的 が重 意 だろう だが翻訳 いったい 9重意味 に K 翻



# 病気のことなど

てもらいお話を伺った。

交を温めつつ、ちえさんにも同席し姿に、私は大変勇気をもらった。旧

ミュージシャンとして活躍している

さんの支えを得て、

今でもジャズ

受けた。しかし同時に、奥様のちえを演奏している姿を見てショックを

村さんが車椅子に座りながらピアノフェイスブックで再会。そのとき中

来ずっと疎遠となっていたが、昨年、

としての人生を歩き始めた。それ以村さんは、卒業後すぐにピアニスト生時代からプロ級の腕前であった中業に就職していくなかで、すでに学

である。

仲間の多くが卒業後一般企

同じ大学で青春をともに過ごした仲実は中村さんと私とは十五年程前に

中村新史さんのご自宅に伺った。場がはいいだけである。「塚の海辺に住むジャズピアニス

一一こちらに引っ越してからもう一年くらいと聞きましたが。 **すえ** 二○○八年の四月に倒れて、それから一年くらい表に引っ越してきた。 た一年くらい子ヶ崎で療養して、それから一年くらい茅ヶ崎で療養して、それからがようやく復帰。で、今年の四月に倒れて、それがよっからもう一年くらいまケ崎で療養して、それからがようやく復帰。で、今年の四月で復帰二周年。

4

活から何からすべてを変えなけ

れのば生

復帰といっても、それまでの

ったのではないでしょう 大変な苦 1労だ

中村 なけ ちえ くリハビリをつづけないと。 セントとまではいかなくてもとにか が落ちたから、まずはゼロ ればならなかった。 ずっと寝たきりで全身 下半身が麻痺だから、 ーから いまは 百 0) 始 筋 パ 1 肉

中 村 ちえ 中村 ちえ なんで歩いているんだろう、 窓の外でみんな歩いているのを見て、 ないかと、こっちが心配していた。 思ったことは一切なかった。 もうやだ、 傷で首から下が麻痺になった人が、 戻ってきている。 でも それはあんまりなかった でも内心は思っているんじゃ 生きてても意味は ん、入院中窓際にいてね。 ね、あんまりつら あと、ある雑誌で脊髄 なんて ないと いとか、 ね。

> と思ったね。 リムリ (笑)。 そうしたら、めちゃくちゃ痛くて、 を見て、 もう死ぬしかない、 んだけど死ねなかった、という記 試しにやってみたんだよね。 何言ってんだ、コイツ と思って舌を嚙 L 事

は陥らなかった……。 あ んまり いつめ ら れる心 境に

ちえ

はじめは歩けるように

な

るっ

中 村 間に合うかなあ、 四カ月後まで仕事入っていたから、 ンセルしようか、って。 た。 少しずつ近い仕事から減らしていっ て思っていたんです。 を全部キャンセルするのではなく、 入れてもらうために、いきなり仕事 での生活になることを少しずつ受け そう、 あるところから、 意識戻ったときに、三、 っていう感じだっ だから車 全部キャ ·椅子

ちえ よね。 絶望感とかなかった った後でもそんなに 場 かった。 たんだけ 無理って分かってい 合、 こっちは 無理だと分か بخ でも新 言えな 史の 絶 た。

中村 アノを弾きなが いたとき、たまたま りの音をどうした ダルが踏め た言語 せるか思 でも 療 法 ない 案して 士 から、 0) でピ 代

に

い面があって、

進

]

から声

がかけ

づらく

てね。 ね。 ないって分かるんだなあ、 近づけている。 による微妙な変化がどうしてもあっ ないんだ、って思ってしまったんだ 考えればその人は音について言った そうか、 ょ いないんだけど、 の時は過敏に、もう自 に のではなく、ペダルが踏めないこと 0) が 対して言ったのだと思うけど、そ 人でもやっぱり音楽的 客観的に聴いてみると大して違 それには いまは七割くらいは前 し 11 ・です 「あ ね」って言 自分の中でペダル ĺ 」って思った。 分の音は戻ら って。 ったんだ の音に か足 今 ŋ

ャンルだと思いますが ―ジャズって、 その 点 は 柔軟 なジ

り、 るかな。 b ちえ あと演奏する場所 る音をどうやったら再現 というよりも、 けどね。ジャズプレイヤー 中 イ たいなあ、とか、 わらない。だから今は演 いうことだから、 L 片手が使えなかったりする人も いなあ、とか、そっちの方が悩 . 村 限られてきてしまうというのはあ ブハウスで、バリアフリーは全然 ね。だから前の状態に完全に戻 なんだろう、機材 確かにクラシックじ 特にジャズを演 頭のなかで鳴 結局 階段のぼれたらい を自 病気の前と変 奏できるラ がどうして 奏のことよ できるかと 一分で運 では や つてい 無 み。 結 理 だ

今、

ミュージシャンとしてつら

えて見える別のところに。 るし、今後は限られた中でこそでき そういう人たちとは る。 元に戻るのではなく、辛い る密度の濃い仕事をしていきたい。 たって声 でも病 をかけてくれる人もい 気前よりも音に念が増し いい演奏ができ 経験を超

は、 ちえ たぶんね、新史にとって音 けていることです。普通みんなどこ かで夢を諦めちゃう。 大学以来ずっとピアニストでいつづ 食べる、寝る、と同じくらい 何より僕がすごいと思うの

中 の 村 よ。 のことしか考えていないなあ。 子の生活になっても変えよう そうだね。 結局、 日 **)がない** 中 音 楽

たり前のものだと思う。

それは車椅

#### 悩ミみュ ジシャンとし ての

んでないから、そのへんは現実的 なってきて のプレイヤ 75 中 村 抽象的 かはっきりと摑めない。 どういう きはつらい。 ストに自 ないことが多いから、 きかな。僕は言葉できちんと る人とうまく意思疎通 ったのに、 いことは何ですか? たまにだけど、一 な表現でやりとりするから、 もともと言葉で定義できな 分としては応えられたと思 ふうにプレイ 相手が満足しなかったと 大体ミュージシャンは 相手の が取れ すれ ミュージシ ばよい リリクエ れないと 確認し 演 奏 す

思っている。 思っている。 思っている。 と、だったらそいつ雇えばいいじゃんって神経を逆撫ですることにもなって、あまりはっきりと言わないんって、あまりはっきりと言わないんって、あまりはっきりと言わないんがよ。でも僕は誰それみたいにっていうだよ。でも僕は誰それみたいにっていう。 要でやりとりしていく必要があると思っている。

**すす** …、「しまールで終しい」で悩んでいるもんね(笑)。 って悩んでいるもんね(笑)。

話してんだっけ。

・中村 ま、それはそれで楽しいこと中村 ま、それはそれで楽しいいかもね。
なのバックで演奏するときなんかは、
スのバックで演奏するときなんかは、

中村 じゃない。そういうところがないね。 をとりながらやっていこうっていう は大きな仕事に繋がるようにうまく ちえ 危機感はあまりないよね。だ てただの生活苦だからねって(笑)。 が言ってるけど、ミュージシャンっ けじゃないけど、あんまり気にしな 下心というか、そういう意識がある から大きい仕事のときも、小さい仕 いかな。 パーソンとコミュニケーション 生活の不安とかはない? 生活の不安? 知り合いのミュージシャン やる姿勢は一緒。普通 ああ、 ないわ

中 村 したりするんだけど、なんだろうな 弾いてる時の不燃焼感みたいなもの ことと言えば、ポップスのバックで にもなった。ああ、そうだ、つらい 捉えてはいない。ビジョンを持って かな。もちろんライブをやって感動 ってきて、どれも楽しめたし、 んなに選り好みせずに、 いるってことだからね。 かった(笑)。でもそれを悪い意味で いう意識はないと思 実はみんなあることが最 ってたけど……。 まあ僕はそ いろいろや 勉強 近

――「商品」となるポップスの不自 お金にならないから……。 するのは楽しい。でもね、ジャズは ションとかやって発散するね。ジャ う。だから終わった後にジャムセッ 感というか……。 ちゃうというのかな。 になったものを演奏するのは、 しいんだけど、一度出来上がって形 あ、 ズの方がずっと自由度があって演奏 人は、結構そういうところあると思 ャンの人でポップスの仕事している 作り込んでいく過程はすごく楽 ジャズミュージシ 弾き足りない 飽き

由さと、より自由度のあるジャズの**中村** そうだなあ、バランスというのか、なんというのか……。たとえば山下達郎は自分が本当にやりたいドしているってどこかで言ってたけドしているってどこかで言ってたけと、アーティストはみんなそういうところあるんじゃないかな。でもこと、より自由度のあるジャズの

新史はミュージシャンはみんなそう

れはなかなか難し

い問題だね。

表示。 ――そうした意味で、特に目標にして感動 エルダーっていうピアニスト。確かなもの た。あ、最近かっこいいと思うのはいあや きになる感じかな。だから僕自身もいろや きになる感じかな。だから僕自身もくれるや きになる感じかな。だから僕自身もくれるや さいなあ。その時その時に自分が持って ないなあ。その時その時に自分がまもの た。あ、最近かっこいいと思うのはいて感動 エルダーっていうピアニスト。確かろうな キルギス出身だね。

# ボサノバの詩はすごい

ちゃうこともあるなあ。詩っ 音楽だとこうだらだらと弾い にも通じるものですね。でも インパクトありますね。 いだからってのもあるけど、 するけど、 中 っちゃうの? したいことがあると、長くな てどうなの? なんか付け足 れができて、 . 村 僕らは 詩は短い言葉でそ 長い文章がきら イメ 1 ジを音 音楽

作者の情念のようなものが湧言葉を選んで、その背後から言葉を長く重ねるより、短い音楽に限りなく近いと思う。

ね。一つの音にもそういうものは必中村 ああ、それは音楽でもそうだき出る感じかな。

**ちえ** でもこの間話していたけど、

ずあるね。

ちゃうよ! ちゃうよ! なっておかしくなっいるときに頭をいちいち通していた中村 そりゃそうだよ! 演奏して

**中村** いや別にそんな意図は全然な別に悪いとは言ってないじゃん。



詞とかありますか。 音楽で言えばこれはすごいと思う歌――これまでインパクトのある詩、

もう忘れちゃったけど、忘れてもい う書いてないんだけどね。英訳だと スタン・ゲッツがすごいブラジル音 あとアストラッド・ジルベルトがア ゲッツとジョアン・ジルベルトと、 からすればなんだボサノバか、って ごい確執があるというか、アメリカ がアメリカに輸入される背景にはす ンが監修した訳以外のボサノバはほ 詩の意味を汲み取っている。ジョビ ていうような内容。はっきりとはそ の人が主人公で、おそらく誰かを殺 来もっと暗い、というか、有名な「ア たいなところがある。 ると、あんなアメリカなんかに、み んと適当だね。というか、ボサノバ た英訳は必ずポルトガル語による原 をすごく意識していて、 トニオ・カルロス・ジョビンはその点 ンタジーの世界になっちゃう。アン いような (笑)、なんてことないファ してしまって、その許しを乞う、っ ガジュベベ」という曲も、本当は女 ーテインな感じになっちゃうんだけ ポルトガル語のボサノバって本 なんかファンタジーとエンタ なんか原詩がね。英訳され ブラジル側からす ボサノバの なん 前にスタン・ あれも実は 彼が関わっ だこり 詞 p

> (笑)。 聴いていると微 カに入っていった時は、アメリカ人 険悪なムード は相当見下していたんだ。 少なくともボサノバ ル の中で作られたんだ。 1 アル がそう 塵も分からないけど ムはもの う態度 がアメリ が

しているのかな。

一一なるほど。面白いね。音楽の歴
中におけるアメリカ帝国主義みたい
な。例えばジャズはアメリカから日
ないのできたけど、アメリカから日

が 上。 いるし、 んだっけ? らなんだよ。でも最近はすごく変わ より白人の方がギャラが安かったか も白人プレイヤーと黒人プレイヤー で言えばむしろ、 良ければ人種の垣根はない。昔の話 レイヤーもいれば、 的に人種の差別はな たかもしれないけど、ジャズ 中村 昔は若干はそう がたくさんいたり。 ラックミュージック的要素の強い人 ージックの要素のないプレイヤー った理由は、 バンドを編成したときに白人が多か では差別があった。これは黒人の方 ってきていて、黒人でブラックミュ 秋吉敏子がアメリカでビッグ 韓国人も 同じ技量であれば黒人 同じアメリカ人で いる。 フィ 61 逆に白人でブ いう面 つまり音が IJ 中 何話 ピン人も 国人のプ もあ は基本

**ちえ** 言葉について (笑)。

ち

飲みなが

それにジョ

# 見えてきたもの「3・11」以後、

もらう。 できそうなことだったら参加させて 国民として生活しているんだから。 きだと思う。だって僕だって一人の るけど、 関わるのはどうか、という議 中村 昔からアーティストが政治についてどのように考えていますか。 大それたことはできないけど、協力 アーティストの政治的発言 よく原発問題について触 ―そういえば、フェイスブックで 僕はどんどんやっていくべ れてますが や活動に 協論はあ に

**ちえ** 「R&R」って曲書いたじゃん。 中村 そうそう、ロックフェラー& ロスチャイルド (笑)。 ――世界を牛耳る連中……。

えやがってさ!

中村 いや複雑な問題にさ、モルガン系の金融機関に勤めている人融機関に勤めている人を知り合いのジャズの上もいたり。全員が全員でな……複雑なんだよ。でさ……複雑なんだよ。でな……複雑なんだよ。

自 ちが減ることじゃない。自分たちの に流出することで自分たちの食いぶ るかって、やっぱり福島県民が県外 ら、いま福島の役人が何を恐れて でも同じ構造があるんだなあと。 になるような仕組みをつくる。それ 天下り先を用意し、自分たちの利益 僚はうまいこと言って政治家を操り、 金融資本が政治家に圧力をかけ、官 の仕組みってこうなってるんだなあ っていたことだけど、やっぱり世 言えば、「3・11」前から薄々分か もこれから二十年はいてもらいたい 給料がなくなるんだから。少なくと は中央官庁だけでなくて、市でも ってことが見えた。なんだかんだで 論したらけんかになっちゃうよ。 分たちが退職するまで。 そうだね。ただ私的なことで 「3・11」でやはり変わった? ほ 町 e V



うなって。 教わっていたあ うのも憚ら 力 ま思えばやっぱり誘導してたんだろ いくと、やっぱりそうだなあと。 っていたけど、いろいろ状況を見て 「時はそんなわきゃねえだろって思 金融資本の影響受けてるんだな。 有能なんだけど、アメリ 僕ら学生時 11 ちえ

でも、 中村 ういうことを気づかせてくれた。 ることをあんまり疑ってこなかった。 た。それまで世の中で是とされてい 自分が知らなかったことを露わにし ――つまり、「3・11」というのはそ あれで気づかされた。 そうなんだよね。露わにした。

ちえ

ちえ るの? うタイトルを付けるとか。 中村 とか。とにかく、やっぱ疑いなしで さっき話してた音の背後から出てく 信じ込むのは良くないなって思う。 でも まあ、 ているわけじゃないよね。 直接的に音楽に結びつけ 単 純だけど曲にそうい R & R っと言えば、抽象的なアートとして

考えながら演奏しているという感じ。 ようとか そう なテーマがあるところで演奏 、体的に反原発のイベントとか、 は 思 わないのです ぼんやりとだけど か? やることはいいんじゃないかな。て いうか、

赤十字はどうなってんだ?

なんか個人名を言 中村 ラグドで、 3 • 11 震災チャ アコー 」から十日後、 IJ ディオンで参加し テリー はやっ アン たな。

そうそう。

泣いているのに、 な泣いちゃいけない、と思いながら 客さんの顔を見てたんだけど、みん たし、ある曲のときにバックからお テージで百万円くらい集まった。わ 加した。川崎のアートセンターでや ったんだけど凄い熱気で、二回のス たよね。それは自分から挙手して参 すごく胸に来るも

めて震災や原発に関わることを書く でも「3・11」以降チャリティーも含 ちょっと話が変わるけど、 ――音楽のそういう力は羨ましい。 のがあった。

詩の世界

う意識を音楽ではどういう形にして だった気がするよね。新史はそうい いを最初に歌にしたミュージシャン 忌野清志郎って、そういう疑 ど意味がないという意見もある。も 会的にインパクトがなければ文学な 尽きない。人の不幸をネタに自己表 家や詩人がどう向き合うかは からそうした政治的社会的問題と作 人が多いんだけど、 現するな、という考えもあれば、社 文学の場合は昔

論 が

中 村

「Rの二乗」とか。二乗って英

という感じで表現している 中村 うーん、もうちょっとみんな 立は音楽の世界でもありますか? 開かれてるのかな。チャリティーを な立場に立つ作家が常に対立し議論 のもある。文学の場合そうした様々 治的イデオロギー、思想に則ったも くリアリズム文学もあるし、ある政 が繰り返される。そういう議論や対 の文学もあれば、現実を虚飾なく描

ア 5 中 ホかって思うよ 募金。 え? 災 地 届 いて

な

W 0)

するっていう感じ。 ちは音楽で何かできることがあれば できることをすればいいって。 てたけど、みなさんが自 ちえ 京大の小出先生が 分の範囲 演 で言 私た で 9

り長くならない程度にね。 この曲はこういう思いで作ったとか 伝わるものはありますよね。かメッセージを出すだけでも 紹介したらいいんじゃない? でもいいし、弾く前にMCを入れて、 **ちえ** そうですね。だから「R&R」 メッセージを出すだけでも確 ライブでちょっとお客さんに何 あま 実に

ちえ たんだ。 じゃあ、「R&R」に戻そうよ。

中村 あれは「アフロレッド

上になっ

お客さんには伝わらないよ。 調べなきゃ分からないようなことは **ちえ** 知らない(笑)。ていうか君 語でなんて言うんだっけ? が

か。 ち そろそろ日が暮れるから海に行こう 中村 そうか (笑)。 ろ部屋で海の音を聞いてる感じだね。 中 か。海にはよく行かれますか。 んだけど、海辺の生活ってどうです ――そうだ、最後に聞きたいことな んだよね。あまりに近いとね。むし え 久しぶりにね。 うーん、あんまり海行 久しぶり かな

# 村新史(なかむらしんじ)

と共演。レコーディングやサポートを行 & Bなど様々なジャンルのアーティスト 動するかたわら、ポップス、ラテン、R 卒業後、ジャズライブハウスを中心に活 にジャズに目覚めプロ活動を始める。 中高からバンド活動を行い、 幼少よりクラシックピアノを 大学在 始め

も多数参 またクラブミ ジッ ク系の ア ル バ ムに

「自己免疫性脳脊髄炎」2カ月の昏睡 2008年4月、 態から奇跡的に生還。 急 病にて活動休 状

2010年、 車椅子生活を余儀なくされる。 結成し復帰。 自身のカルテットを新たに

独自の感性と演奏スタイルで、 イブを展開する。 オリジナル曲を中 に都 内や ア シー

http://rsygt314.blog112.fc2.com 中村新史オフィシャルサイト

な音楽を目指している。



曲名「R&R」 写真をクリックすると、 映像をご覧になれます。 @ K A M YouT M E ube でライ

О

年8月1

 $\exists$ 

# 詩情と空間〈1〉

### 浅野言朗

00・はじめに

けではなく、 である時も、そうでない時もある。 進めて行くが、実例は文字通り〈詩 れるべきものの手がかりを見出した 察することで、今後、新しく創造さ 相にあらわれる〈詩〉的なものを考 法として取り込むことは可能であろ りながら、 物事の仕組みや構図を覆す事例を探 い、というのが論考の主旨である。こ 文字通り言語芸術としての〈詩〉だ 〈詩〉的なるもの= ここでは、〈詩〉を〈詩〉 も含めて大きく考えてみたい。 とは 主に実例に即しながら話を その方法を自分の創 か、を考察する 様々な表現や営みの諸 〈詩情〉について、 な揚 的なる 作手 力が b

定してみたい。れるべきものを、あらかじめ仮に設であろうか? 最終的に結論付けらでは、〈詩〉的なるもの=詩情とは何

ここでは、

機能 行く過程 て系を取り巻く環境全体が変容して 舞う系の状態、また、その結果とし うことを停止し)、手段であることを 止めて、 から与えられた役割にそって振る舞 とを中止し(それぞれの要素が外部 る 目 自律的に(自走的に)振る 連 的)を持ったものであるこ 0 道 具立て(要素) が

することとしよう。) 差異と類似については、いずれ考察としておこう。(〈異化〉との意味の

除して、合法と違法を切り分けるためえば、言葉はその表現される内容を伝えるための道具であるとをしてと・目的との関連といったことを拒る。例えば、仕事上、〈建築基準法〉を日常的に読むことになるが、ここで使われている言葉とになるが、ここを日常的に読むことになるが、ここで使われている言葉は、〈詩〉としてる言葉とは全く正反対に、含意を担答の表現される内容

ど厳格な機能を持っている。めに使われる、という厚かましいほ

を持っている。 うに詩的な生き物は回 始めてみよう。人間のように多くの あるから、クラゲのコレクションを 有する各部位が柔らかく一体となっ 5 称の構造をしているが、クラゲのよ 器官を高度に進化させた生物は線対 た、クラゲのような存在である。で 話 〈詩情〉の現れとは、身体の諸機能 は、 て行く。 連想的に ′ 〈詩〉的なるもの 視点を移動させなが 転対称の構 Ш 造 を

情を考察することから始めよう。転対称である〈三角形〉における詩であるから、論考は最も原初的な回

## :ゲームの構図

01

て勝 るが、そのプレイヤー ゲー めにある。ゲームの種 より優れた側を勝者として決するた 敗を決める方法は幾つかあり、 4 やスポー -ツは、 ル の配置に関し 類 1 は多岐に渡 ル 0) 中 で

がグー ヨキ グー 三者の力関係が、 は容易に理解出来るが、 である。日本のじゃんけんにおいて、 円環が終わりなく循環し始めること じゃん 点と底辺が逆転して強者と弱者の 純な一方向の強弱関係にならずに 最も弱いはずの者に負けることで (鋏) がパー (紙) に勝つこと (石) がチョキ (鋏) に勝ち、チ けん 石 の構 に勝 図で興味深 最も強いはずの者 つのは何故 パー 0) なの (紙)

この、 ゃんけんを見てみると、一層はっき論理・視点のすり替えは、他国のじ 象・人・蟻の三つであるようだ。象 りする。 ずなのに、 材質としての硬度の問 つことになるのだろうか? 三すくみを成立させるための 例えば、インドネシアでは、 すり替えが行われている。 蟻が象に勝つことには 人が蟻に勝つのは 石と鋏 **金** 問題であ 属)と紙 何 いったは そもそ 理 解 飛

てい ような、 できる道化師の存在によって覆され 0) 三すくみと同じように 両端をまくりあげて縫合してしまう キー 成でも、 厳格な上下関係であるはず という構図は常套的に存 幾何学の位相をゆがめ 王に自由に近づくことが 王を頂点としたヒ であるのだろう。 史 的 な社 エラ る 在 会

#### 02 椅子のジレンマ

け わ る話を滑らせるように

ということに関わっている。中心

直線を引き寄せて、さらには

後

上に脚をの

なぜ四 とあ 答えは覚えてい る高名な建築家は、 この詩的な問いかけの肝心な 本の脚があるの 脚 で成立するはずの ない が、 か、と問うて 力学 能を失っ が 椅子に、 的 には

た(最 発散を始めて、未だに収束することの四本目の脚をめぐってデザインは なものであったかも知れない れば、椅子の 違いない。 文的で饒舌な家具となったことは目の脚によって、椅子は、極めて 初から与えら 椅子に脚が三本しかなけ デザインはもっと簡潔 椅子は、 れて な が、こ 几 間 散 本

イナ

1

が、

ある理 方向を見ながら椅子に腰掛けている。 掛けることが許されたのは王であ そも最初の椅子は誰のためのもの るいは座っていない状態を明示する道具ではなく、座らせないため、あ 陽から発して神殿の奥深くに引き込 この時、王の視線と平行な軸線は、太 ブシンベル神殿の王の像は、太陽 と考えるのが自然だろう。例えばア にへたり込んでいた時に、 ったろうか? ためにこそあると考えられる。そも L かし な [は、本来、椅子が座るためがら、 椅子に四本目の脚 やはり、万人が地面 椅子に腰 だ 0 る、 0) が

まれる。さて、椅子に内在する強度 恐らく正面を向きながら終わり 03 Perfume

方へ送り込むことで軸線を明示する、 れを跨ぐように、前後左右に四本の 心地よく座る、という せるのではなくて、そ 椅子は、 さら み度 け た のもたらす ることの強度、それから、 に、 三という数字にとどまり続 発散 について、 その 考えて

このテクノポップユニットと呼ば る女性三人組 私 は 音 楽が ほ 温は興味 とんど理 深 61 解 できない 音 楽に が、 関 n

ことがもともとの機能なのではなく

たのだろう。

座

7

e V

るも

のが

11 ると

> b 0) 11 座を明示する、 な /空位であ 11 とに 関 n わらず、(空位 ばなおさら強く)そ という為にある。 であ って

5, いる時間のとあるデザ あるものではない。椅子も同じように、 強く暗示している詩的な存在である。 先してデザインするべきだ、と言 てもなお、走行していることをより たようである。車とは、停止して 停まっている状態の見え方を優 方が 圧 倒 座るためにのみ 的 に良は 良いのだか 61 9

もなさそうだ。

れた場所 るのは、 である。機能から離脱した時にこそ るためにあった。椅子は空位 あ れていることの 本来の象徴的な意味を持つと思わ 椅 るだろう。 た場所であることを、強く暗 子 あらゆるものがデザインさく徴的な意味を持つと思われ ある人が座るために用 誰も座っていない時にこそ、 詩的 なよりどころで の明示 意さ 示 す

> それ は、 こで、〈三角形〉の均衡、という する ぼれた人種にも興味を持たせる。こ にこだわるところにあるように思う。 の魅力は、〈三角形〉の均衡に徹 ているかも知れないが 幾重にも使われている。 が、私のように音楽から 多くの場 で類 似 の論考が · 、この三人組 きか 落ちこ 底 的

比喻的 発端 けることにこだわって した頂点を持たない/主従関係のな じ続けることによって、三人が突出 続性のある視覚的キャラクターを演 ていない。それぞれが固定された継 髪型にルールがあり、 る。この三人は、それぞれの服 呼ばれる女子三人がつくるものであ い、均衡した厳格な三角形であ となる最も小さな近景として な 〈三角形〉は、メンバーと 基本的に変え いる。 ŋ

では 次の 頂点は、やは 話題を織り交ぜていく三人のキャラ と、それらを演じつつ合間に自在な り、その魅力は音楽だけにあるわ 角形である。このユニットの人気 ŋ の三人と、音楽プロデューサー、 いように、 クターにある。この三角形の三つの が付け師 属・付随 密はライブを中心とした活動にあ るように なく、それに合わせた振り付 中 景をなす三角形は、メンバー の三者 適切な距離感 しているようには b, ħ どれ かがどれかに からなる三 で 保 見ええな たれ it け 0

強

くった世 とともにある、と繰り返す。これは さらには観客・ファンということに 分 たちの舞台はスタッフやファン の言葉または社交辞令というよ メンバーはことあるごとに 界を見に来ているのではな れる。 り手の姿勢の で支えるスタッ 景としての三 の一つの頂点としてそこ 観客は、 表明であるよ 作り手がつ それ 形 いからそ そ

る、 点から発してそこに帰還して静止 とにある。この自走的な法則 という構 Perfume の均衡を保つことに努力の 三角形が一点に還元され ということのないように、つま 少しずつ上位のスケー れて 隅で始まった小さな三人 螺旋形の軌跡を描きながら、街れているように見える。それ均衡を保つことに努力の大半があり続けるために、たえず三角 幾重にも三角形を設定し、 永久機関のように終わり らゆる出来事が、 一つの頂点へと 0) 図を見事につくっているこ 力 あらゆる大きさの 近 中心的 がり込 り上 中 の集 ない三 の 三 Ш ま 位 な一 がな れる 運 小 遠 す

> し始め、 であ たい た世 考えている。その手法の探索を主に 作り手の手法にかかっているの するか不毛なものにするかは、 める。その〈詩 〈詩〉と ているので、それを豊かなもの 界に た世界には、〈詩 〈建築〉に即 疲 ħ て、意 なるも 情〉には偽物も含ま して進めて行 味を失って漂流 情〉が 味付け |溢れ始 だ我と々 5 発 <u>\*</u> に れ

という と思わ 数字を よう。 遠藤周 点から、 今回 相 O工 ス・ 誕生』を中心に見て行くことにし れるキ その その先には、 れるだろう。 作 キリスト 三 を進 芥川龍之介 『イエスの生涯』『キリス 神話 リスト教につい め 形 の根幹に据えてい の強 の言葉=詩と た。次回は、三とい 『西方の人』と 自ずと違った位 度にお ける詩 う } 観 う イ る



# 中村剛彦の Poetry Reveiw ②「『日本人』 であることの不穏」

| 憶の島ー岡本太郎と宮本常一が撮った日本』展 (川崎市岡本太郎美術

を書いてみる。 思えてきて、ノー みし、鞄に潜ませた焼酎 あ 違った人生を生きるのも悪くないと 草を吸う。すると不思議とこんな間 て歩き疲れたらその土地に 的 でい 日、三日……と続くと、私はどこでも う思 る神社やお寺を訪れてみる。一休 もなく巡る。ひたすら歩く。 はない。見知らぬ めて動 時 から旅にでることにする。海 々 け に襲われ、じっと足下を見 違っ ŀ を取り出 日 本の土 を飲 しまっ が一日、二 古くから た、 Ļ 地 そし を目 詩 لح 煙

かしてくれそうだと直感したからでたのか、その謎をこの二人は解き明 日 う 二人の巨匠について、さほど興味も もそもこの戦後の美術界と民俗 あ ある。猛暑の中を車を走らせ、 展覧会に興味を持ったのは、なぜそ 知識もあったわけでは は し」の習慣がある私に、この展覧 太郎が生まれた川崎の 日本」を旅し、詩を書きつづけてきやって私はいつも壁にぶつかると 大きな問いを投げかけてきた。そ このような典型的 る美術 館へと向 かった。 にな都 ない私 広大な緑 会人 仏がこの 0) 岡  $\neg$ 地 学 0 会 癒 に 本

て『民衆』の姿を見ながら、高度経この展覧会の趣旨は、「『日本』そしう。それは「不穏」の一言であった。先に鑑賞後の感想を言ってしまお

には、 再発見. りと捕えられている。東北地方に伝性に満ちた生活を営む風景がしっか 畏敬の念を抱きながら呪術的 など、人々が日本の大いなる自然に景や、恐ろしい形相をしたお面など ……、そして祭りや神楽の舞台の光 る子供たち、念仏を唱える老婆たち 人々、漁をする人々、 映しこまれていた。農作業に の土地のドメステッィックな生活が にしえから営まれてきたその土 なく旅した二人が撮った写真 ろまでの、 かに五〇年代後半から七〇年代 ジーに浸れることを期待させる。確 というと穏 ームページ)であるから、どちら 承されている「オシラさま」という 現在の日本人が見失った、 しようという試み」(美 北海道から沖縄までを (代化) やかな気持ちでノスタル で失わ 裸足で走り たも い勤しむ 六の数々 (物も で 一地そ 神 ま 0 秘 回 41 隈

お であ 0) ごとく密生する人間の姿も映し込 ビルディングにまるで蟻の巣の蟻 れている。謳 逆に東京や大阪といった近代都市の 示されていてなかなか興味深かった。 小さな男女一組の人形は、実 す 長 ることを示されたからか 対比としてはうまい展示であっ (近代化)で失われたもの」 が い文句通り「高度経 「不穏」にさせた を

(15ページにつづく)

#### 目 钔 の な ペ I ジ の た め に 1

#### 戦 前 0) 力 X ラ ワ

#### 小 林 レ ン F

\_\_

日

だその のであ 義で括 区分け で曖 史と称 ずりだしてみても、 分になる。 るに過ぎな るほか認識への通路はないの 見慣れた標本が手もとに を 支配者 としてははなはだ物足 昧な生き物の首を絞め 1 ○ 年 に たユダヤ人との 中に る。 り、一方通行的な年表に留 Ĺ す 小説、 多種のイデオロ なにごとかを 狭苦しい穴に手を突っ込ん あるひとつの るも 少なくも人間の歴 書物の運動 動きを止めたそれ 偶然的に織り込まれ い」(寺 の歴史であって、 0) 随筆、 勝 は 潜の 田 通 文 以 寅 例王者、 を固 明、 歴 彦一 文、 残るば ギー ろう 史 両有名と主へ、官報を いている気 から ŋ 九三三)。 テ っないも - の混在、和 、勝利 れては 人間 ٤ 0) 以 ク かり 虚 捉 降 ス いた 0) 8

う。 (中 一人間 つの る動 者と で開化の一瞬間 とか 義のために定義を下され したものだ。「定義を下せば う括りかた自 ム固 るテクスト 夏目 だと提げて歩く訳には タリと入れて、そうしてこれが うなもの タリと糊細工のように硬張って るだろう。 もまたこ フリー 着し する 系に きのうちにある過 間 死 蠅 漱石一九一一)。このとき、生 者の位 の歴史」の とか巡査とか騎兵とか云うよ た 0) ク ・略)開化と云うものも、 充足 0) わ のごとくに動いてる。それ そもそも たしとは ح を を前 せず軋轢をきたしてい 相 加 見 に過 担し 去に をとってカメラにピ が 足 な 運 にし 現代にまでつづく 逆 ŋ 動 ぎな 投 転 戦 7 を性 て、 影 去、未だに一 する。絶 行きませ いることに 6 たもの 0 したフレー b L 急 戦後 7 自己の その に 在  $\epsilon \sqrt{}$ わ ええざ 開化 時 しが 切 ٤ を るだ ん 汽 た 車 ま ピ 定 13 断

力 レン ダ 1 上 で 人 0) 物 眠 ŋ 0) は、 整 理 たとえば さ れ た

<

できな

の微

は的

Z

ぎ的

しうることをも

0

仮

死この 書き から

お

を綴

世

界

は すぎる

落

せ

しをまな

遠

学という地理的出していなから 小さな軋っ だが、研 たろう」。日本なことも、「 イコ と生活世 出していなかった。一九二二年入らないということ」としてし る。三木の一 ていた大学者があるという嘘の 争を知らないで研 ツ 代 てはじめ 2戦争」 り、事 特性ではない。「日露戦争の学生だけの、そして一次大戦 本に 九 て囚 クなものとして反省され 全く無関心であった。あるい いなが 0) 軋みにとどまるだろう。あ 心であることができた」(三木 いないも · 事 1 四一)と綴るときに打ち破ら あ ルそ ŋ 件 究 お 大 わ から、私 多く `るいは個を巻きぞえにしない や「政治」、また歴史的事 て、 ではない。世界史は、 n 室」という空間が生じるの 界の断絶 いて「ド れ 十分あり得ることであ 本が ま は の、そして一次大戦だけ 九 0) 次大戦 たまま 的、 月二十 小さな不 世界史的意識の 同 としての 0) ひとりの日本人に「近 意識にとっ 世界に開い 時 ているだろう。 たちは政 戦争という大事 究室の 時間的落差を伴 が、リアリスティー、また歴史的事件 イツ語の 代 の体験は、当 世界 自己や 快には、 政治に対 L 生活を続 る。 た哲 史が て生活 本 たからこ なが手に、当時の á 誕 周 治 時、戦  $\equiv$ 生と よう 当 直 偶 親 のか 伜 学 は し 囲 11 木 然 7 接 Ó it 時 清 7 L は 上 か 9 留 n 無 0) 回

0 0

う し か。 し る。 述の辺 えら なかで、 性」「主張」を告げるテクスト らに困難である。 のような」 まりにも自 現代 れ 間 境、 て どのようにして、この「乏 のわ いるもの  $\square$ 主題 生 明な生 に分け入れ たし 0) 様相 0) いかもし 一や思 にとってこ 強 外 0 部 靭 にばよい 物な「思 考 13 想像」 お 0 れ e V な 痕 想 たち 0) 0) や 二「個 Ġ だろ は は 0) さ 嘘 n 記 あ

契機

自

人に

例 な

的 省

与

想する。

的

反

ようなこと」 「現 では と で多数 であり、 べきか。「伝記」は種々え、以上をその名に固 を混在 を描 釈 柄 との葛藤、 であり、 であり、 モポリタニストであ 彼 クストも るだろう。 たイメージは幸福 り、安定した一者を形 はない。その名が取り のみ特権 自 体はし の足跡 の発明者は彼では は を知ることで宮沢賢治を ひとつの むことで時代は照 垂 の事 直 させるものに、 近代主 東北 鳥南 かし、 を追 常 的 に深まり 流入を示す。この多様 主 柄 に与えら は解 蛮 いかけるべきか。 が の言葉とエスペラント 体 宮沢 近好きの 整序され、 一義者であり、 いて をピック は ゆく ない。 11 ク 見 射され、 過 れているわけで 、賢治という名に だけ 単一 安定 つぎる。 ることだ。 ス 成 集めている事 0) 有 ベジタリアン 次すると アッ 卜 事 0 玉 では 部 個 0) し 理 柄と個人 属 コン循 一解しう 賢治 が分とな 回のうち 性とす 名を与 農学者 プし、 逆に コス (V) テ 0 性 者

無数の穴が空き、褶くすことはできない 葉の の言葉が コン は結びつき合う 宜 一体を見 断絶を来す。 できない。その紙云ンテクスト」に還云 整合的地 ある地 通 褶 水となる多 図 せる 曲 を含んでしま たえざる っぱかりでな み方 ※を無理 特 る多数の言 権 流 Þ 版面には は、 八人する。 的 すると 過 なポ ぎ け に  $\mathcal{O}$ 目 押

なか に習う「文」 して人は しうるようになる。 運 ゃ 一文の体験は明確な意味を結ば丸暗記を強いられる小学生に、れば万物の靈なり」です っただろう。 前 ものとして結晶し、なんだ「ひっかかり」のの回想によって、はど 明 主を 運 治 は、「神は天地 0) の小学校ではどれている。「教育 す 0 はじ 実 0) 0) 0) か の主宰に ではじめ の主宰に ス体を投 記憶が めて身 0) あ ら ふこ 寅 地

る

るとそ

う

が

す

と

回

て理かし

代入するこ

可 0)

とし

同

ですもの

で

かりう

下

個

々

親

う

可

の一世代

つつつ、

し

7

を

等

は

者

であ 的

社が信奉

した亀井茲監の、明治三、明治三、日のののでは、明治三、明治三、明治三、明治三、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本の れゆえ、 引用、 包 イ批の 言及し、 ガロ相違する批判的な大川に 教育に 回 想は、 明 ッ つする 7 き寄 外 ド」であ の手による「天皇 元 と、その を は 出 来物 年 が、二者 府 平の祭政一致にないけられている。 の意 った」(一九 ろ ハが洋書 概観 るとい パー 「危険」への した西 危 スペ 的 う説 な寺 思 か、こ ク 洋

0)

田化

に の神ではない異邦を司を不穏として大言を不穏として 彼らはこの たのは彼ら た木下 きなかっ すべき -ジされ はは彼 ら自誤 てしまう。 ない異邦 のとして読 0) 『神』と - を、近2 読」のな を、近代日本人の信奉身だったかもしれない。 云う 天皇 の一神のみが 代日 危険を犯してい 歴史から抹消さ IJ み スト ま 抜くこと 0) 制

イメ

できない ざるをえな では 8 玉 想 神 「家に連 玉 7 とする。 家神 彼 の一神と う いのに対 ば道のそれ なるも 大川 な · 寺 捉 し、木下 とし とし えうるも って読 『が、この神 7 一曲 は、 寺 むこと 政 散 田 文字上 解 発 と 致 神 す せ予 が を る

0)

想

そに中学し、 形成へに対する 見 を が 現 う 置か神 ŋ す集 冊に 治 と機 であ は、 めである。 七年改正の『第八級 20 n 翻 玉 」などという神学とはほど遠 の本の翻訳では 再 れる。 で含さ も優先され、個々の1へのリアリズム、有1 らの 訳、 する冒瀆でさえあ れないし、こ 提として与えようとする意図 は 出 古典であ 編 れユダヤ・キリスト 所 気 いすべてに見 ただその 成している。「 は当 編集しうる でを散 を持ってい 既成宗教に固 「与えようとする意図は、 「一点でさえありうる。 「リズム、有用性がなにれ、個々の信仰を解体 ている。「出典」が、国 ヤ・キリスト教であれれ、関係ない。十八文字 しうる概念は、実際上 しうる概念は、実際上 でに見いだしうるのだ。 その名は頂点という位 次の n Ü 一文 の頁では 0) ح むを 第一 0) 養うためな 有 のドグマ 運 連 文 自 文 を支 の寄 体、 は、 語 を為 図 明 原明配い せ

は絶えずずるているに過ぎ 込まれ 的に事 とする とする る。 けであ 能はこの誤 に、その 識 の」とし み手もまたこのすりかえの系に は 奥に は、 自 らに 個 えずずらされ、「 木 態を が、 あ てしまうだろう。 別 下 神 て思 る不明瞭なものを、 的 対 切 0) す 誤差のうちで自らを保友すらされ、「曖昧な神」の過ぎない。 敵対者間の対 対立者 押し な批 重 立 っ先を逸らされる。 両 和局のところ自思対立者から見れば立する異教を排験 層化とすりかえのもとサイドからの批判的意 のべてしまえば、 判的意識 小 危機に 彼ら から、平 しかし 罰 ばこじつ 0) 自ら 保存す をなし が 巻き よう おう 記 0) 対 0) 憶 読 面 機 話

その 化される 生じてい 実体化 意識 は、錯 しえない 理念に反する特定の つづけることに、 b が る。 を現 が わ L 0) でいるである。それでも複数の抵立ているである。 、た宗教混る 亀 たとき、 てはまなざしえない あるだろう。 たしもまた 交差を契機として、 『裂は露開』 にまる 開ル して させる。 - 時代を読むわずかまた「ひっかかり」 が信 の化以 異教」として 宮前に す にすでに 不可 彼ら 整合 る b 和 経 不 か 験 視 明

の屈 足 らをその りな Ш ス 古 有 名にも 心思想 れよう か 時 ラン らい切りたい。 おいけん 切りたい の飛躍が許される から読むだけで 全訳 غ す Ź に判 なら 向を か かう。 か ば、 るな で 狂 延 b 彼 生で は 人

5

瞬発 からB、 大きなる 西洋 体 石 運 って意識 本 般 動 は の漱 0 任近代史に比して、 と意 あ に 的 開 現 石 分節 追 か 代 に無我夢中で飛びついめたかも天狗にさられ В いつくことが つ非連続的 識とのギャ 題 0) け目を することが からCへの 下るにしたがって、 開 は 漱石の の効果を失って は発 開 外発で る。こ であ ッ んできな プであ 移 日 可 びついて自営 あ 行を する 的 ŋ, 能 す 本 でない。激がいる。激がいる。 であ では 9 わ な る。 ゆく て、 峻 れ 開 わ 行く た男 その る 化 别 ち な Α H 0

勢他性、のの、

0

テクス

死

うちにあ

でしか立た に終わる に終わる は重要な戦 になる 外や新 意識 なら と記 な相 ば、 0 人間関係の 論 旧 互 述 61 一干渉 ち 出の 理 0) 峻 現 に 0) 来 経 別と す れ 事 験 す を だ れ の此ば ŋ 体 な がの あ 失ら ŋ 、「本の不 い「場本 って 弁 概 的 る。三木に 0 13 か 細 な地に 念と出 えてし 証 起 法に 合の不 こる に読 な 11 が す る。 摩 場 屈 て · 足 と まうこと 歴 むこと 0) 固 あ 曲は 行 と理 運 史 でずの ず 思 事 執 る お か け 0 する 的 動 想 کے 0 な る 内 を L に 発 事 運 論

るだろう。絶

対

なも

0)

0)

連 化

環に

P

は

ŋ

写写

しそれ

自

や意識

5

史

É

定

フィクションに(一九三三)に美 かないの一段 ること し 述たさ 兼をし たびに よっ た男」 るだろう どの れて よう 上階 7 自 0) ŋ で た代 が 筆 事 表 0) 0) できるだろうか。 分 証 で 11 で書いた日記体のの名もない一女官が 件されに るような 件 が 13 る。これ 部 を聞 ク る し 着 スト かに た人間 では、 定 9 0) 7 らし 目 いて 型 き と はたしか する。あ 気持」を でしい な を は 天 あらゆ 実であ  $\neg$ 0 0) ること 狗 定 仮 想 段客をしい。 ず にさら の も が寺彼 想人 が 日 と、 が 汲 る る お田は つ 存 物 7 \_ V1 0) ぼ 歴 7 せ でわ を 寅 み 史 在叙には 一つ彦 n 疑 史 取 気 れ

はむしろ捨象と断片化の運動なの 意識的に関わらず、なされている 意識的に関わらず、なされている はむしろ捨象と断片化の運動なの はむしろ捨象と断片化の運動なの をして「切り捨てた世界をもいっ ワークへの欲動はくなる」(寺田寅 せる固定性 ハトと呼 「寅彦一九三一)カ 的的 は、テクスト 目 とりこ な定 なも を向 応 か 5 しようとする Lの運動なのだ。 なされているの ない。意識的無 対応した単一の 絶えず つ瞬 0) ぼ 義 け ニー) カメラものを収めた を拒が が る さ ために 重 れ 逸脱 要請 三要にな 0) 絶 る 的 か 石 L 請さる 瑣な 有 し、限 は 動 末 運 か 開 カ ふいている た一文、「i 鬢糸禅 き所 られ いる。忘 断 異 ŋ 両 る あ 寅 つ三つころ 髪洋 なる ウ 氏 出 景 る 彦 く。 では た。こ ŋ 0 自 征 物 : 装 の 批 カ 榻 0) 0) 体 こ痕 曲 ド の歎をなすも 争 強烈さ の産苗通 を聴 女子と共に の跡 カット って 日 な電 木  $\Diamond$ 安定 0 燈 か 亀

動なみに深かも方おく 小ら ねいと記的れ読 方は必 るだ から く熟読する態 主の け 0) 体 とき 大ビ 辺 りこんでし ろや 遊 0) る複数の 0) う。 と要であ 離する ざわ 経験 走 不 残 映 8 } ŋ 0 デ きを る。 度、 1 可 K 駄 る 画 読 主 連 門 0) 物を まっ は、 欠に み」さえも ン 続 前 0) 同 グ シ 固 ま が を 性 な原る 時に、 悪 たんん 板 0) 7 1 着 対 顔 いとるに 化 を 橋 L 0) たも要請さ に、写真的 に、写真的 に、写真的 のでは、 も要請 って 出 る 力 あ 骨 「したり、 たり 物 非 フ たち、 注 地 造 かを な 点 意

7

のの

で

の経路は

はほとん

で

す

が中

たよ

旧

波

特

い今

ま

0)

な 0)

いう

で

ت ع

に

する態

は

む

ろ

う

よう 記

なカ

ツ か

な

つき

0) な

な

ように

カット くこと、 ない 夢見 応を さえも アリ ため か。こ と夢 たい。 で 想 n 11 ない ス へと裂け目 ば 幻 起 کے さらにはフランスのと裂け目にそって滑 視 解 すること…、 評に答う』一九三二)こ ない」(永井荷風 メラをさげて』一 てきたいならないに か。 の亀 時 0) き 運 からかろうじて の亀裂には、 わ にどんどん変って行く。相は老眼鏡のくもりを 代 0) 動 コンテクストに まだ問 日木のもとに立ているとので 3と西脇 可能 たしもまたさ いて感激を 気が さまよ いたり 幻惑され は、 性 そこに 苗木が 著音 から、たした 0 順 7 が Oた風 0 光 ĺ 折 現 あ  $\equiv$ を す L 正 h に とどま 能 催 機 に ま 救走 立 た膨 代 る 郎 ン まよ 忠実 シュ 気景を切 宗谷 一って、 0) 過 って す 照 お な 意 大 込 0 5 < 0) 植 つ わ 5 たく せて ま で 去 0) す 事 奏 付 出 か れ 瞬 わ 間 0) ル ゆ 0) ベ は す け さ 7 0) は 呼 崎 れ 田

木下 で開 ル を止められつつある旧 尚江は幼少時、 にさらし首の姿をとって近 レ 「今日は P 催された博覧会の帰路 女たちは一八七三年 ij ス 厭 イ な ツ ク ば 人たちを目 ح か を終 明 ŋ 制 えるよう -松本城 見 えたた 度 にある。 る の茶 代 が 撃 日

その両 書き、 角 前近 名の 続性に死を与えつつ、その することも含めて、 る。 たの がら 引き裂か な物」を 世 0) がし だ。 代、 集 界 顔 から をし てく 間 者 メ 意識 であ モ 0 からひとしく引き起こされ 近 ħ 食えない人もあった」。 未来に転送 生 IJ 偶 代 た身振 2めて通 るだろう。 然的 1 の裂け目で、 はしかし、それ の至上権は主体的 から目 るだろう。 は、この な身振りを追 り、この つた」 小さな運 するの の端にとら 写真、 身 痙攣 身振 だ。 振り 青 おそらく を記 、メ 動 りは える 「厭 を 0) Þ 放 行 顏 見 モ 動 連 視 述 す L な

子の

「の「胎

児

0) 0

璃

の前では、婦人連は、斜 に残像する。博覧会

れが又

損じたのも無理はない」(一九三二)。

人の首は単に近代が片付け忘れた

なのだろうか。

ホルマリン漬け

梟首を見せられたのだから、 ながら顔を顰めて通った。それ

気色を

ラス

のなかで保存され、 生まれる前のものであ 的威力が露出している。

知と有品

ŋ,

b

に残存する。

力

は

L 用 ガ

学 露 方

0)

食にさらされ消失する。

法

っているにも関わら

ラベリングのもとに

不可

化 的 出

さ

な象徴

から

散文的

0)

はし

かし

の過

#### 中 村 剛 彦 の Poetry Reveiw 2 <u></u> 日 本人』であることの 不穏」(つづき)

K 隠 るさと」という抽象語 理 L いう国家共同 ぎ とら どう 生 され 7 由 いたからであ 々しい、 ている「日 た写真 そうでは .本と宮 体の 痛々しい生態を 八の数 る。 実体、 本の 一本人」の、あまり へ々が な 眼 によって覆 " 日 普段は「ふ K ょ 不 本」と いって剝 映 穏 ĺ 出 11 0

ち」の羅列 لح によって組み直された日 ま かそ の存岡 業的資質の差がはっきりと出 え躍 0) った特徴を持っている。そして、 れた日本の「美」と、 く分節化され れは学者らしく、 本のそれは美術家としての感性 ても この両者の「眼」、そ L で 怪物的な美的感性によって焼き込 りこんだ写真である。片 取り方が「美的」であ 分に活かされており、 L して「戦 7 11 いい。それぞれの写真には 後日 けは、 後日 本」という全体性を形 互いに補完し合うこ 本の 採取された」と 風景も人物も 眼」、と言 れ b, 構図 本の 強靭 を や宮本 敢 かなり や陰影 「かた な知 一ている。 えて い換 そ 性 職 13 細 0 が 飛

失う。

野蛮な旧制度からクリーンな

向

かう進歩の像は融

解

だし、「厭

べるだけでは、

出来事はその

特

を

渡期

における新旧の平板な共存を述

0) 0)

胎

は

脱

魔術と科学の到来として

み彼ら

の目に映っただろうか。過

るが

ゆえに差異が立体的なも

のとな

」として二重化する。二重化す

片方は有用性の世界から

れ、生を終えたものであ

b,

り、腐食の切り落

る。これには 0) 旨 再 文脈も読み で そ を重 あ れ その裏に「 る「失わ ゆえに、こ 築」なる意図 ねて、「日 0) 取 3 · 11 過程と、 ることが れ 本 戦 た日 0) があるとも言え 後 展 を再 日 覧 本 以 現 できる。 本 . (7) 構 在 降 0) 0) 再 の歴 全体 築 0) 表 :発見」 す 0 復 戦 趣 史 性

> は、 の「現実」とは何かを。 考えざるを得ない。現在 ゆえ「不穏」になったのだ。そして の生々しい解剖写真に見えた。それ 写真が、「戦後日本」という「国 本はそれを剝ぎ取らなければならな 分かっていてなぜ岡本は、そして宮 リの現実」と述べているが、そこまで に―」(『民話』第十八号・未来社 について―『日本残酷物語』を中心 本は宮本と深沢七郎との鼎談 な村人の生活と対をなしてい あって、それはあまりに貧しく ものは、本来写真などには撮 てしまうほ 企図への かったのか。私にはまるでこれら は ると思われ 0 一九六〇)で、「残酷」とは「ギリギ だと。 ならない村々の 私 眼 を凝 利 れ た。そこに映し出 どの不気味さを放 用 らしてみるとその 尚 価 本と宮本が撮 それ 値を大きくは 「秘儀」の で構 0) った写真 日 る。 かって I され はみ出 世 5 ような 残酷 界で 残 ħ 本 家 0 岡 酷 7 た 11

が 一 日 れも残 私が「日 み、育て、いま老いていっている。 本も 答えてみる。これらの写真と いま私は身近なところでその 私 用 酷な「現実」である。そして 本人」であ 両 本」を旅できる理 国 親は青春を生き、 どこか間違 家」を恐れて詩を書く。 せずに来れたからであ るという「 って 由 私を は、 現 . る。 同 問 実 私 生 時 13

#### 書

生

#### 0) 種 子 0) ŋ 倉 田 良 成 **『**グラベ ア 樹 林 篇 を 読

む

#### 水 島 英

ない。 返る。 は稀 丈を 遭 うでもよく さなとか大きなとかの形容などはど ことは、 すぐ隣にある小さなものに目 ために、 むしろ見ないために、 意識のうちに通過してしまう。眼 くときは幸せだと思う。しかし、それ るいは苦痛を訴えているのかもし たり、目 することと言ってもい することになる。 ならない。 片ばしている。玉珠の紫色の花 それをこちらに迎えとること ほとんどは気づくこともなく、 のうちに更新された視 視野に捉えられたものに気づ の花を読解するとは、 つめる。眼をそらして、 左右や上下を捜 その小さなもの そこには小さなも の糸の そこを通りすぎて後に振り その緑を薄くして めたりしているようだ。あ するとその そこに 花 大きな葉 迎えることを、 何 が 張り かの 宝 秘な働きに 0) 索している。 雨 世界は小 世界と出 4 珠 0 いる。 『覚める 一今は曇 その 野を 巡 防 が は中 0) 目 ح 葉と ののこと らさ 御 眠 小 で のは 無 n

のがいるとしての残虐さに抗しの残虐さに抗し 生の由来をなんどでも辿ってみれぬものはいないだろう。この世とは何か、などの疑問にとり 衰えをは 葉で語 ラベア ために と迎え なら るかもし や、 と、 ここに、この うに考えてみたい。 と、それも根源的に辿ること。その 説話とし なもの、 るすると 今、ここの びて 11 |補強できるかもしれない(い) ってみせること、 やそれを今、ここで自己 は神話や説話を読みなおすこ 限りの生を 私にとって りすぎて振り返るし から して今に 0) 林篇』(ワー 鷩 ない 持つ意義 嘆(その読 、はそれ て、 現世 しつつ、それにも関 を 通 異人等)との 衰弱 残されて り過ぎたも 生とは何 き 0) いとおしく思うも のいびつさや、そ ぶぶりの を私 故) この 『グラベア樹 倉 ズアウト Ļ 宝 田良 忘 れない は以 珠 いるだろう。 どこ は神 強 0) れさられ か、この かない) 成 0) 上のよ 分の言 花 調 現 出 発 0) 一憑か るこ 世や に に (\frac{\lambda}{2}) 世 ま ゛ 行 で わ Þ で

0) 神 話 的 擬 伝 説 的 な

主

は

述

ユ

ダ

ヤ

た空を

眺

め

やる。

茎

は

い土地に住むことになるが、故郷の故郷から千五百キロ以上離れた新し族の流浪が始まった。」。この一族はなくなったので、土地は捨てられ、一 いうよりはもっと自由と似ていなくもないけ夫の『わが出雲・わが関係について考えてみ るものとに代れ うだ みの共有があった。女たちには新は一族だけにしか分からぬ深い悲 るが語 終 の精霊の秘密をひらい < ことを忘れたわけでは あるときもうそこに住むことはでき タラに残された最古の伝承によれば の像 帝紀」という記紀神話起させるようなタイト 簡 手 イ 9 てに、二段組みでみっしりと註 名 であり、 単に わる。 ソン 本文は次のように始まる。「ヤム でつながっている。 「5 のも ある。」と註釈で筆者 赤ん坊が生まれ、土地は け (ヨリ 5 旧 でも 考えても が わって得たのは 0) れ 説話の マシの ヨリマ えば 語り手(老バイソン)も いて考えてみよう。入沢 ている。その など。十八編 それは何人であ ない。そんなことを老 シの 枠組みを作る役割 ように 私) も意味 ジプト 私に だろう。こ 由 け が はない。「そこになるが、故郷の た。 な広 بخ を思 って むしろ痛切な 鎮 0 ル、「ヤムタラ 作 魂 品 作 があ はまた一つ 緊密さと と註 捨てるこ った。」と れ がりと想 空しく 脱 のそ、 にお のすべ せる 0) 侵 出記」 の物 りそ しう 聞 釈 釈 を 趣 لح き L れ 康 H バ L 0) が

スポラの民になったのだという「痛たい言葉だが、ついに我々もディアれた言葉として記憶にとどめておき三・一一以後の日本の現実に向けら 切な」 い。に大きな変化を与えずには 代で、 て「故 ばれる。これは何よりも倉田良成われの現実となったのである。」と 0) 現したことは、二〇一一年三月 0) 強制 出 リン・ソ 0) 来事で、 地 認識は逆に神話 日 移 離から歴 を失うということが、こ 住が取りあげられる。 本の現実の土地に初めて 連での わが身をもって、 史現実にお や説話 11 け Ġ るス わ 麗 から 0) 0) n 現 出

か、今はての実りをな うな いう希点 高次の ように を開 がある。大震災・津にいるのだ」という書目 性という堅 験は、その ンに「人間 く、いろいろ教えられ れらから示唆を得た本文や註 てきた柳 - スらの 実りを我々の生にもたらす 倉 を取 仕 田 示 意味 包ま 有 が 学問 7 ることで、 不明であ 親 0) な 田 ゆく、 経験 人間 で実り豊 0 い殻の中に包みこま れていて目立たない。 炙するようにして 価 折 真に証 知 の種 の生のなかに種子  $\Box$ は 津波・ やレ 疑うこと ね っても、 見 実はそ ばり 子が 評 かなもの た。 ヴィ のなかの言 言力をもつ経 言及 強 原発災害と いかなる真 は の時 ベンヤミ っかどう 吐釈も多 スト は 愛 できな 直 から れ 直 葉 7 最 0 口 接

簡単な臨終 ジュー ル・ラフォルグ (吉田健一訳)

陸でなし。 -又五月になったが

そしてお前は胸を一杯に膨ませて、それでも胸がはち切れて死ぬ お前は前に言ったことを繰り返すことしか出来ない。

ということもない。

こんなことをしていてはならないのを

よく知っているのだ。

その陸でなしのお前は、

ああ、いつか

自然の或る又とない瞬間を逃さずに、

凡てであるとともに唯一である私の歌が

夕方の空に昇って行き、繰り返され、言うべきことを言うための

努力が

それに籠められ、 地面に向って落ちて来ては又昇り、

人々の胸に響き

嗚咽の独唱になり、

歌われている内容に従って、

又昇って行っては地面に向って落ちて来るように。

ああ、 私の音楽が、

肱を突いてもの悲しげな顔付きをしている

その写真通りに、

十字架に掛けられるように。

もっと危険で高級なものに見付けなければならない。

我々が住んでいるこのありのままの世界で私は

何かもっと別の主題を、

もっと危険なのを作ることにしよう。

そこで人間の魂も、

凡て単に肉欲的でしかない関心も音楽に連れて動き、

夕方、盛んに吹奏楽が起って、

それは野蛮であり、

一切の希望は失われることだろう。

検証に検証

それがそこで許される唯一の祭なのだ。

私がそう決めたのを誰が止めることが出来るか。

私は寝台の上に新聞や洗濯もの、

流行の服の図案や何でもない写真、

社会の母胎である

一切の資本を積み重ねる。

それを誰も取りなそうなどとしないように。

他に何をやっても駄目なのだから。

対策はただ一つしかなくて、

それは凡てを破壊することなのだ。

ああ、夕方、盛に起る吹奏楽

それは野蛮であり、

切の希望は失われることだろう。

そして我々がどんなに人生を踏みにじっても、

動物が不当にいじめられて、

決して綺麗になれない女がいるという

人生よりも残酷になることは出来ない。

誰も取りなそうなどとしないように。 ただ凡てを破壊してしまう他ない。

ハレルヤ、 陸でなしの地 球奴。

夕方から明け方まで

切の希望は失われることだろう。

夕方から明け方まで

何もなくなってしまったら、きっと又何か出て来るだろう。

レルヤ、 陸でなしの地球奴

芸術家達は、「もう遅い。」と既に言った。

地球が滅びるのを

早めてはならない理由 はない

民達よ、 武器を取 れ。 理 性 がこの世 から失わ n たのだ。

が風邪を引いたのは、 この間の秋だった。

或る美しい日の夕方、彼は狩りが終わるまで

彼は角笛の音と秋の為に、

角笛の音に聞き惚れていたのだ。

「焦れ死に」するものもあるということを我々に示したのだ。

人はもう彼が祭日に、

部屋に「歴史」と閉じ籠るのを見ないだろう。

この世に来るのが早過ぎた彼は、大人しくこの世から去ったのだ。 それだけのことなのだから、 人よ、 私の廻りで聞いている人達よ、

々お家にお帰りなさい。

ないように思われる。 る詩人のひとりである。ラフォル ―一八八七年)は、いまなお気にな ユー の気分とそれほど遠いも く憂愁 spleen は、いまの ル・ラフォ ル グ(一八六 ので わ れ

芻されていいと思う。その上で、翻ない。だが、このことは何度でも反返すまでもないことであるかもしれ宿命的なことであり、いまさら繰り として、これまでさまざまに訳されラフォルグの詩は、上田敏をはじめ訳の、翻訳者の、精神を味わうのだ。 思いもなお捨てがたくある。これはないのである。」(折口信夫)という おどれいるや、さう言つた人の育つ詩のことばことばが、らんぼおやぼ「日本の国語に翻し後づけて行つたでさまざまな翻訳詩を読んできたが、 秀雄の『地獄の季節』など、これま學の『月下の一群』、あるいは小林音』、永井荷風の『珊瑚集』、堀口大 純なものではない。上田敏の 玉 それらのさまざまな翻訳詩を読むと れぞれの国語の陰影を吸収して行か て来、又人々の特殊化して行つたそ るが、翻訳詩を読むという行為は 訳されたフランスの詩を読 てきているが、どの訳も味わい深い。 語の中に鎖されているあの純粋言いりのであります。 というわけで、 今回 む 日 ので 本語 海 潮 単

日本の「口 るのだが、もとより、この「自 自由詩を書いた詩人のひとりとさ 文学史的にいうと、 って思 さ ラフォ ル グ

の韻律の劇を日本語で享受することたといわれる。そうしたラフォルグ かれるものに対して、一行十四音節ンスの詩の多くが一行十二音節で書 臨終」を読んでいると、さすらう詩 訳したラフォルグ晩年の詩「簡単な 数も、詩節の配列も忘れて」しまっ というものであったようだ。そのラ あるはずもなく、それは例えばフラ ているのだ。」 していてはならないのを/よく の陸でなしのお前は、こんなことを 人の精神に触れることができる。「そ はもちろんできないが、吉田健一 27歳で死ぬのだが)、「押韻も、音綴 フォルグも晩年近くになると(彼は 形と韻律法から自由に逸脱していく で書くという、つまりは伝統的な 語自由詩」と同じもので 知 が 詩

紙から) は雑色の古くさい悪夢です。惑星地のだってことを思ってもみない歴史に汚い。上出来の冗談は最も短いも ……人生はあまりに味気なくあまり 球は完全に無用なんです」(ある手 一僕は神秘主義的ペシミストで

ことになる。そして、これらの詩が れは、その孤絶の精神と向かい合うラフォルグの詩を読むとき、われわ 少しも古びていないことに驚く った生涯をたどりつつ、あらためて ドイツへとさすらった、長くはなか 南米ウル グアイから、 フランス、 ので

ること、 語を翻訳固

作品のなかに囚えられてい

有の言語のなかに救済す

のためにかれは自国語の腐朽した

者の使命である。この使 を改作のなかで解放する

だ破る」

ということば

が

せなかったのだ。
せなかったのだ。
はから彼との再会は、私にとって当時にが語っているようだった。しかしお互また遠くまできたのだと、その寡黙な表また遠くまできたのだと、その寡黙な表まがいるようだった。しかしお互がい音楽も詩も手放さなかった。

ケゴール) これがあらゆる絶望の公式である」(キル自己自身から抜け出ようと欲すること、自己について絶望すること、絶望して

る。しかし私は「絶望」などという大げ、いいでは忘れていた一節を、茅ヶ崎からの「公」が詩や音楽、いやすべての芸術表現、が詩や音楽、いやすべての芸術表現の東海道で思い出した。もしこの「公婦望」こそが創作の源泉であると言えいます。

midnight press WEB(隔月刊)

第二号

2012年8月3日発行

編集人・中村剛彦 発行人・岡田幸文 発行

ミッドナイト・プレス

揮毫/谷川俊太郎

イラスト/永畑風人

それは嘘になる……。で、詩はおとずれるように思う。そしてで、詩はおとずれるように思う。そしてただ日常の中で一瞬、放心しているだけさな表現ではもはやそれを語りたくない。

らは遥か遠い淋しい駅であった。(中村)海道で眠り込んで、目覚めたときは家かそんなことをうつらうつらと考えて東

○「言葉の調べと翻訳」などが収められ ○「言葉の調べと翻訳」などが収められ た」として朗読された「スピノザを謳っ の終わりで、「実はかねてから、私自身 底に残るのは、最後の講義「詩人の信条」 の終わりで、「実はかねてから、私自身 を記み終えたいまもなお胸 の終わりで、「実はかねてから、私自身 の終わりで、「実はかねてから、私自身 の終わりで、「実はかねてから、私自身 の終わりで、「実はかねてから、私自身 の終わりで、「実はかねてから、私自身 の終わりで、「実はかねてから、私自身

スピノザ

ホルヘ・ルイス・ボルヘス(鼓直訳)

息絶える黄昏は不安と寒気である。暗がりで水晶を細工し、ユダヤ人の透けるような手が

(黄昏は黄昏に似ている)

穏やかな男には存在しないも同然だ。明るい迷宮を夢見ている色あせていく黄玉の時間とは、あの手と、ゲットーという場であの手と、ゲットーという場で

眠りのなかの夢の余映、名声にも、彼はこころを乱されない、別の鏡の

うら若い乙女たちの内気な愛にも。

星である〈かの人〉の無限の〈地図〉に。細工する、骨の折れる水晶に、一切の隠喩と神話から解放された彼は

られた一行が気になる。
4・3・3ではなく、3・1・4・3・3で書かれるのだろう。このソネットは、4・かれるのだろう。このソネットは、4・かれるのだろう。このソネットは、6・で書いる。なぜ、この詩に惹

、黄昏は黄昏に似ている)

(Las tardes a las tardes son iguales.)

田) 田) 田) 田) 田) 田)

## ○今号の執筆者

水島英己 一九四八年生まれ 小林レント 一九八四年生まれ 瀬尾育生 一九四八年生まれ 瀬尾育生 一九四八年生まれ

## 編集室から ――

# ∫ミッドナイト・プレスの詩集

間を独自の感性で捉えた第一詩集。過去と未来とのあいだを夢のように揺れる時柵野初希『夢の揺りかご』 1890円



#### 既刊

『流木の人』から三年。詩人の精神が刻印さ川田絢音『ぼうふらに摑まって』 2100円



# ○ midnight poetry lounge のご案内

「詩の図書館」をオープンしています。現在、○詩の図書館 http://www.midnight-poem.com/学沢俊介「吉本隆明と私」(仮)12月1日本ではのは、

## ○自費出版のご案内

自費出版のご案内をお送りいたします。たします。どうぞ、お気軽にご相談ください。して、様々な書籍の自費出版をお引き受けいして、様々な書籍の自費出版をお引き受けいる。